資料　1

会　議　の　要　旨

会議の名称	第 4 回川越市介護保険事業計画等審議会
開催日時	平成 31 年 2 月 12 日（火） 午後 2 時 00 分　開会　・　午後 3 時 45 分　閉会
開催場所	川越市保健所大会議室（2 階）
議長氏名	会長　齊藤　正身
出席委員氏名	岸委員、小高委員、伊藤議員、荻窪委員、今野委員、宮山委員、 川越委員、佐々木委員、橋本委員、荻野委員、小林委員、長峰委員、 芝波田委員、舩津委員、米原委員、原委員、矢代委員、横田委員、 中原委員、田中委員
欠席委員氏名	桐野委員
事務局職員等氏名	後藤福祉部長 健康づくり支援課：嶋崎課長、佐藤副主幹 高齢者いきがい課：渕名課長、吉田副課長 介護保険課：小高副部長、貫井副課長、白石副主幹 地域包括ケア推進課：荻野課長、三佐崎副課長、冨田主幹、佐藤副主幹、福島副主幹、門倉主査
会議次第	１　開会 ２　あいさつ ３　報告 （１）　第 3 回川越市介護保険事業計画等審議会について （２）　地域包括ケア「見える化」システムによる介護保険事業の川越市の現状について ４　議事 （１）　第７期計画の進捗管理について （２）　第８期計画に向けた施策体系の見直しについて（案） ５　その他 ６　閉会
配布資料	１　次第 ２　第 3 回川越市介護保険事業計画等審議会議事録…資料 1 ３　地域包括ケア「見える化」システムによる介護保険事業の川越市の現状…資料 2 ４　第 7 期計画の進捗管理について…資料 3 ５　第８期計画に向けた施策体系の見直しについて（案）…資料 4-1 ６　第８期計画 施策の体系イメージ（案）…資料 4-2 ７　退院時連携に関する専門職からの意見聴取の途中経過…資料 4-3 ８　すこやかプラン・川越 - 川越市高齢者保健福祉計画・第８期川越市介護保険事業計画 - 策定に向けたスケジュール（案）について…資料 4-4

議事の経過

１　開会

２　挨拶

会長による開会の挨拶

３　報告

（１）第 3 回川越市介護保険事業計画等審議会について

事務局より、資料 1 を用いて報告

（２）地域包括ケア「見える化」システムによる介護保険事業の川越市の現状について

事務局より、資料 2 を用いて報告

（会長）

この「見える化」システムは全国一律で始めているものであるが、この資料 2 はまだ考察がそれほどついているわけではないので、これを見てどう思うということはないが、ご意見ご感想はいかがか。

（委員）

感想として、資料を見て傾向がわかるといった点は良かった。ただ、グラフの色が見分けにくいので、色分けを工夫してもらったら、より見やすくなると思う。もう一点、グラフの表には表題があるが、数値の表には表題がないので、数値の表にも表題を入れてもらえると、見やすくなると思うので、検討してもらえればと思う。

（会長）

折れ線グラフは点線とかがあってもよいと思う。区別がつきにくいので、少し検討が必要だろう。また、比較対象となる自治体の絞り込みも必要だろう。

（委員）

二つある。一つは、データを見る時にどこに影響を与えているのかという、３つの要素を抑えなくてはいけない。例えば６５歳以上の何パーセントの人が特養を使っているかというサービスの受給率、６５歳以上の人全体で特養を使っている費用を割り込んだ被保険者一人当たりの金額、実際サービスを使っている方一人当たりいくらなのかという３つの要素を分けて見ないといけない。単価が下がっているのか、利用者数が減っているのか、その結果として全体がどうなっているかを分けて見ることが必要だと思う。受給率と被保険者一人当たりの費用、利用者一人当たりの費用をサービス毎にまとめられると、どこに問題点があるのか、どこがポイントなのかがわかると思う。

もう一つは、資料では通所介護と訪問介護は減ってきているが、これは総合事業との絡みがある。通所介護と訪問介護だけ見ると減っているように見えるが、総合事業に移行した部分があるので、本来はこれら両方を合わせて見て、全体としてどうなのかという見方をしないと間違った解釈をしてしまう。

（会長）

一つ目の視点については、次に資料を作成する際には盛り込んでいった方が分かりやすいのだろうか。

（委員）

単価が下がっている部分、単価は変わっていないけど総額が下がっているということは、利用している人が減ってきていることに繋がると思うので、そこを分けて見た方がよい。

（会長）

数値がただ低下しているか上がっているかではないということなので、その辺を工夫した方が良いだろう。こういった内容は広報していかないといけないことかもしれない。しっかり考察して、川越は今こういった状況だということについて、計画書を作る３年ごとだけではなくて、時々は広報等を通じて報告できるようなことが必要かもしれないので、より一層精度を高めた方が良いだろう。

（委員）

先ほど委員からも指摘があったが、いわゆる３要素は医療保険の世界では以前から行なっていることなので、介護保険もそういった少し突っ込んだ分析が必要、あるいは分析できるようなデータが出つつあるのかなという印象を受けた。そういった意味では、一人当たりの単価、受給率などの要素の分析は行なっていった方が良いと思う。

（会長）

どの部分を公表するにしても、データは蓄積していきながら、しっかり考察していってもらいたいと思う。

４　議事

（１）第７期計画の進捗管理について

事務局より、資料３を用いて説明

（会長）

これは、全体の説明、内容というよりも、こういったかたちで進めていくということだろうか。

（事務局）
　資料３として提出したシートは、第７期の計画書に記載した特に推進する取組についての取組状況に関する進捗管理の方向と内容、それと具体的な事業の実績管理ということで、第７期計画期間はこのシートを使用して進捗管理を行なっていきたいと考えている。

（会長）
　第７期計画をフォローアップしていくためのシートということでよいか。

（事務局）
　はい。

（会長）
　何か意見はあるか。

（委員）
　課題と対策というかたちで、前々回に指摘した点が盛り込まれていたので、いい資料になったかと思う。中身については、４ページの高齢者の社会参加と社会貢献の促進の中の介護支援いきいきポイント事業について、課題の対応策として他の分野にも広げていかなければいけないだろうと書いてある。このことについての提案であるが、一つは５ページの第２層コーディネーターの部分に各地域資源の把握が不十分であると書いてある。高齢者をいかに使っていただくかということを考えると、こういったところに使っていったらいかがかなと考える。もう一つ、私も川越市シルバー人材センターに登録し働いている。平成 31 年度の対応策として、シルバー人材センターに登録している高齢者を活用する機会について、シルバー人材センターと連携して検討を行うとしている。具体的に何をするのかというのが一番問題になる。なかなか先に進まないことが考えられるので、ある程度の案を出して、こういうことをやってもらってはどうだろうかというようなかたちで進めていかないと、シルバー人材センターから人を出して介護人材になってもらうということはなかなかできないのではないかと思う。具体的には例えば 18 ページの介護入門的研修のようなものをシルバー人材センターに提案をしてみる。そうすればある程度、こういうようなものがやりたいということがシルバー人材センターからも出てくるのではないかと思う。もう一つ、商工会議所に認知症サポーターについて声を掛けたとあるが、一度声を掛けただけではなく、何度も何度も働きかけることによってそれを進めていくということが大事だと思う。

（会長）
　他に意見はあるか。

（委員）
　この後の資料４の説明にもつながる話しなので、一点だけ指摘させてもらう。例えば、資

料３の７ページ目の在宅医療・介護連携の推進については３つの施策をやっていくとなっているが、医療と介護の連携という施策に対して、それがうまく行っているかどうかをモニタリングする指標として掲げられているのが、検討会を何回開催したかというものになっている。元々目指しているものは連携の推進なので、連携が推進されているかどうかをモニタリングしないといけない。もちろん、検討会を行なったということについては見なければならないが、この回数を見たからといって連携が深まっているかどうかは評価できない。一つ一つが何のためにやったのかということをもう一度見直して、何をモニタリングしていくのかということを考える必要があるのではないかと思う。研修会の回数はモニタリングできるが、それによって元々目的としていた連携が深まっているのかという部分が見えないので、どこかのタイミングで今の指標プラスアルファのものを作っていかないといけないと考える。

（会長）

それは、例えば参加者の声を聞くということなどもそうなのか。

（委員）

参加者の声を聞くということは手段にあたる。参加者の声を聞いて何をしたかったのかという目的があるので、実はその目的が達成できているかということをポイントにしなければいけない。住民の声を聞いたかどうかは当然確認しなければならないが、住民の声を聞くことによって、これをこう活かそうということで住民の声を聞く。その目的が達成できたかというところを見に行く指標がないということである。

（会長）

具体的にはどういったことか。

（委員）

例えば、医療と介護の連携で言うと、医療と介護の連携が深まったら何がメリットとして生じるかというところが目的となる。そうすると、退院する時に安心して自宅に帰れる人が増えたとか、安心して看取りということを家族が行えるようになってきたとか、そういったものが本当の意味での目指すものとなる。そうしたアウトカムに近いようなこと、何のためにやっているのかに近い指標も検討はしていく必要があるだろうと考える。

（会長）

言われている内容はよく分かるが、いつもここで悩む。安心だと考えた人が増えたということは本人に聞かないとわからない。

（委員）

それについては、ニーズ調査などを３年に１度行うことになっていて、その中で国が示す質問項目以外に独自の質問項目を設けている市町村がたくさんある。知りたいことが何かと

いうことが分かった上で定期的にそれがどうなっているのかを見に行くための質問を設定しており、今後は少しずつこういったかたちに変えていく必要があるだろう。３年ごとに計画を作り直していくので、各事業は何のために行ったか、それがうまくいっているのかどうかを見るための指標を何らか設けないといけない。たくさん設けられるとは思っていない。ただし、そうした癖はつけておかないといけないのではないかと思う。

（会長）

このことについては、長年悩み続けていることである。指摘についてはごもっともであるのだが、結局、その利用者の主観的な答えが返ってくることが結構あったりする。例えばサービスをいくつか利用していて、このサービスとこのサービスの連携に関しては満足しているけど、どうもこのサービスとは上手くいかないみたいなものを利用者だけではなくて、サービス提供者が感じていたりする。そういった事をどのように数値やデータ化すればよいのかが難しい。

（委員）

現在、国の方でも事業をやったことで結果的に利用者にどのようなメリットを生じさせたのかという話と、そこに関わった従事者にとって良かったのかどうかという話、それと保険行政にとって良かったのかどうかというのは分けて評価していこうということで、指標の見直しを図っているタイミングである。なので、少しそういった視点も国の動向に合わせて考えていくというところのスタートには立った方がよいのではないかということが指摘しておきたいことであって、今完璧にできるとは思っていない。少しそういった視点は必要ではないかということである。

（会長）

こういった内容は次の議事事項で出てくるのかもしれない。ずっとこういった事で悩み続けてきている。人と人とのサービスの展開なので、受け止め方によっても変わってきたり、何をメリットとするのかという、その辺をこの審議会で決めていくというのは厳しいかなという気はする。国などから示してもらわないと難しいところはあるかなと思う。信頼関係ができたかできないかは、実は仲良くなったかどうかで決まってしまったり、そういう顔の見える関係になったから､何でも言える間柄になったから安心だというものもあったりすると、それをどう数値化するのかというのは難しい。ただ、言われるとおり、研修会を何回やったから連携が進んだというのはおかしいかなと思うので、その次の段階が必要かもしれない。

（委員）

今の話しを受けてだが、資料 3 に記載されている内容を一件一件掘り下げていくのは厳しいのかなと感じる。例えば先ほど取り上げられていた医療と介護の連携のところをモデル的に掘り下げてみるとどうなるのだろうか。国の方でも重視していて川越市でも重要だと思っているということで、この部分をいろいろな角度から見ていくとどうなるかという、少し切

り取ってやってみることによって、見る目を養うとか、タイムリーに特定のテーマだけ掘り下げることによって市民の皆さんにより良い介護を提供できればなと思う。全ての項目をやっていくのは難しいのかなと感じた。

（委員）

3 ページ目の生きがいづくりの促進の部分について、今年度末で東後楽会館が閉館となるが、平成 29 年度に東後楽会館を利用していた方が 4 万 4396 人いて、平成 30 年度でも 4 万人の利用を見込んでいる。このことについての課題として、閉館により運営内容の充実を図る必要があると書かれているが、私は内容というよりも、やはり今まで東後楽会館を利用していた方々が引き続き生きがいづくりをできる場所の確保とか、そういった受け皿をやはり課題としてしっかりと位置付けて考えていった方がよいと思っている。やはり老人福祉センターというのは大事な場所だと思うので、そういったところも今後考えていただきたいと思う。

（会長）

以前にもその意見は伺ったが、それについてはこの審議会で決めることではないと思う。それは行政や議会などで引き続き議論してもらえればいいのではないか。

（委員）

資料について個々の質問になってしまうが、一つ目は 11 ページで各地域包括支援センターの事業評価を行なったとあるが、実施した主語が抜けている。各地域包括支援センターが行ったのか、地域包括ケア推進課が行ったのかなどが分かるように記載してもらいたい。次に 12 ページの権利擁護体制の充実の中で、高齢者虐待の未然防止、早期発見・早期対応についての取組状況で、ひとり歩き高齢者声かけ訓練を実施し、川越市内の高齢者の支援の現状について周知啓発を行ったとあるが、そもそものこの取組予定の内容と高齢者虐待の未然の防止、早期発見・早期対応とひとり歩き声かけ訓練の実施が取組としてイコールなのか。市の方では、ひとり歩き高齢者声かけ訓練の中に高齢者虐待の未然防止なども含めて事業を行なったということなのか、あるいは違う部分の取組をここに表現してしまったのかが疑問に思った。

（事務局）

各地域包括支援センターの事業評価については、市の地域包括ケア推進課にて実施した。ひとり歩き高齢者声かけ訓練については、高齢者虐待の未然防止等について話し合いを行なっている要援護高齢者等支援ネットワーク会議を主体として実施した経緯がありこのような記載となった。委員の指摘のとおり、高齢者虐待とはニュアンスが異なるので、再度担当と確認をさせていただく。

（会長）

地域包括支援センターの評価については自己評価も行っている。自己評価もしてそれに加えて国が定める事業評価の両方行なっている。そのことも記載した方が良いだろう。

（事務局）

各地域包括支援センターで自己評価をして、それを基に市でも評価を実施している。今回は国の評価が入ったので、地域包括支援センターのセンター長に集まってもらい確認を行ったという状況があるので、記載の内容を変更させていただく。

（会長）

資料3の内容を一つ一つ細かく見ていくとまだ指摘事項が出てくるかもしれない。どのように見ていくのが良いのだろうか。1ページごとに審議会で諮るのでは時間がないし、評価方法を含めて何で見ていくのかというのもある。

（副会長）

事業を実施するではなくて、やはり事業を実施したことにより行動変容があったかとか、満足度はどうであったかというところを見据えた上で事業を見ていかないと、この事業の意味があったのかどうかを含めて評価がなかなかできない。資料3にあるとおり、事業がこれだけあって、これで何を生み出すかというところを、この審議会、行政、市民も含めて理解しないと、やっていても意味がないという結果では寂しいので、次の議事事項を含めて議論して、何のためにこの事業があるのかということを共通認識した上で進めていく必要があるのではないかと思う。資料3を個々にいじってみても無駄になる可能性もあるので、まずもっては何を生み出すかというところを議論する必要があると考える。

（委員）

資料3の右側の具体的な事業の成果の中で、網掛けになっている部分の事業は重点的な指標という意味だと思うので、この部分の分析を強化していくのが良いと考える。川越らしさという最終的な目標の議論の中で、市民の自主的なグループの輪が広がるというのが一つの大きな目標だったと思うので、介護予防の推進という部分においては、様々な指標は当然あるが、重点的に抑えていくのは市民が介護予防サポーターの知識をどれくらい得たのか、それによって自主グループの数がどれくらい広がったのか、この指標を重点的に見て行くといようなやり方に絞る方が良いと思う。同じように見て行くと、4ページの介護支援いきいきポイントの課題について、実際に活動する場が限られてしまって、ポイントが付く事業と付かない事業でボランティアの参加の意欲に若干差がついている部分があるのではないかと思う。できるだけ多くの事業をこのポイントの対象としてほしいとの市民の声も聞いているので、登録者がどれだけ増えたかだけではなく、ポイントに該当する事業数や施設数がどれくらい増えたのかという部分も指標として盛り込んでもらって、この事業の輪がどれくらい広

がったのか、ボランティアがどれくらい広がったのかという最終的な目標を明らかにしてもらえれば良いと思う。

（会長）

私も市民からこの事業に登録しているけどポイントの対象になるところが少ないという話しを聞いている。先ほどまでの意見も踏まえて、少しずつ中身を見直すような機会、回数や人数で十分なところもあれば、それだけでは見えないものもあるし、そういったものを少し見極めていくということが大事かもしれない。

（事務局）

資料の個々の内容や整理等については不十分な点があると思われるので、指摘をいただいた点やご意見を踏まえて見直しを図っていきたいと思う。第７期計画の進捗管理については、資料 3 のシートによって進捗管理を行なっていくというかたちで進めさせていただきたいと考えている。また、目標の管理などの方向性については、次の議事事項においてご審議をいただきたい。

（委員）

資料 3 の事業実績の部分について、数値の経過がわからないので、開始時期の平成 27 年度の実績値と平成 32 年度の目標値が記載されているとギャップが分かりやすくなると思う。課題のところについては、今回、特に推進する取組ということが書かれているのだが、内容的には進んでいないものがかなり見受けられる。また、課題のところで必要である、検討する必要がある、調整する必要があるなどあるが、その課題に対する対策に同じような内容が書いてあるものが結構ある。ＰＤＣＡを回す場合に課題と対策が同じだと進捗しないので、この部分を明確にしていけば進捗がうかがえると考える。あと、先ほどから指摘があるが、やはり優先順位を付ける必要があると思う。

（会長）

第８期計画を策定していく時にも関わってくることだと思う。第８期計画も同じように作ると同じような苦労をすることになる。次の議事事項の資料 4 の説明を聞いて、全体的に議論したいと思うがよろしいか。

（全委員）

はい。

（２）第８期計画に向けた施策体系の見直しについて（案）

事務局より、資料 4-1、4-2、4-3、4-4 を用いて説明

（会長）

この資料については委員が関わっていると思うので、追加で説明をいただきたい。

（委員）

第７期計画の時と第８期計画というのは意味合いがだいぶ違う。第７期計画は総合事業とか地域ケア会議などの事業がスタートした時期だったので、色々なことができるタイミングではなかった。それに対して第８期は第７期で行ったことがどうなったのかを評価するタイミングになってきて、今後は、やってきたことがどうであったのかということをチェックすることが中心となってくる。第７期はどちらかというとスタートすることがメインで第８期以降はそれがうまく進んでいるのかを確認して、内容などを修正していく作業となるので、第７期と第８期では意味合いが違うということを一つ言っておきたい。

それと、例えば資料 4-1 にある、住み慣れた地域で安心して暮らすことができるというところで、在宅医療・介護サービスの提供体制の構築というテーマであれば、訪問診療を行う医師が何人増えたかという量の把握であったり、それを利用した人が何人いたか、何カ所できたかという指標で構わない。ところが、医療と介護の連携の推進となると、連携が推進されたかどうかを見にいかなければいけない。だから、見にいくものが何人増えたかとか何カ所増えたかではなく、その中身がどうであったかという意味で、課題の意味合いが違うものが混在している。だから、量のことを知りたいものは、何人増えたとか何カ所増えたかで構わないが、連携となるとそうはいかないという話しで議論をしてきた。

資料 4-3 を見ていただきたい。連携をするのは誰かというと現場の医療職と介護職の方なので、その連携をする人が退院時連携というものはこうあるべきだということを考えていただかないといけないということでグループワークを２回行った。関わっている色々な専門職の方に退院時連携について、どういう連携があったら利用者が不安なく退院をすることができるか、どういったものが良い退院時連携だと思うかという議論をしてもらった。各専門職には、本人が不安なく退院ができるということが必要だということ、本人が納得して退院を迎えられることが必要だということ、本人が望まれる場所に退院できる、ないしは、本人の状態や状況にあった退院先の選択をできるような退院支援であったらいいというような、こんな世界があったら良いを出してもらった。それらを踏まえて、目指す姿として、キーパーソンが適切に関わった上で、本人が納得して、不安なく、適切な場所に退院することができる世界を目指さないですかというふうに、専門職の方の意見をまとめていくとこういうかたちになった。キーワードは納得してと、不安がないということと、望む場所への退院という３つのキーポイントになる。そうなると、下の目標が 3 つ出てきてしまって、不安なく退院を迎えられる、納得して退院を迎えられる、望む場所に退院することができるということを実現するためには何が必要なのかというのがその下にある必要要素ということになる。これらを一つ一つきちっとやっていこうなんて考えているのではない。目指す姿があって、現状

がどうなっているかというところから課題を出していく。課題はいっぱい出てくるが、すべての課題に並列で取り組むことなんてことは普通しないので、その中で目指す姿に近いものであり、優先的に取り組むべきものというものを絞り込んだ上で、いつまでにどのくらいまでを目指そうかという目標と、具体的な指標をつくって、それに向けて対策を検討していくということをやっていこうという話の整理ができたところである。ここでも指標というのは先ほどのような、かつ、もう少し数が少なくなるが、数項目くらいの指標をつくって、そして目指す姿に近づいているかを定期的にモニタリングするような仕組みをつくっていこうということで、もう一、二回ディスカッションしながら、中身を具体化したものができた段階で審議会に諮って、委員の皆さんからの意見を聞こうということで進めている。こういったやり方が定着すれば、認知症施策や日常生活支援でも同じようなかたちで整理ができると思う。そういったことで、一つの案、例として退院時連携を考えたというところである。

（会長）

事務局と委員からの説明があったが、意見はあるか。

（委員）

まず、先ほどの第７期のことだが、第７期については 3 年間議論したのだから、これはこのかたちで進める。その評価については細かくやるのは大変なので、やはりピックアップして、例えば第７期計画の 7 つの目標から 2 つくらいピックアップして、それで指標を定めて進捗管理していってはどうかなと考える。第８期については今回の資料で目標を 3 つに絞っている。前回の審議会でも 7 つあった目標を 3 つに絞ろうかという話しが出たわけなので、第８期は 3 つに絞ってやっていく。特にモニタリンをどうやっていくのかが一番だと思う。基本施策を全てやっていくのは大変なので、絞ってやっていく必要があるだろう。

（会長）

第７期の反省点がまずはあって、そこを受けて第８期の策定を行うということが必要である。そうすると、資料 4-4 のスケジュール表を見ると、第７期計画に掲げた取組の実施と事業の進捗管理をしながら、第８期のあるべき姿について時間をかけてやっていこうというイメージだろうか。

（委員）

第７期というのはある程度提供体制を作るというところ、事業を始めるとか、通いの場を作るとかそういったところがどちらかというとメインであった。だから、先ほどのような指標の何カ所できたとか何人参加したという評価のやり方で基本的にはいいと思う。平行して、連携とかのテーマに関してはそうはいかないので、第８期はそこの部分については少し具体的な方法論をつくって行きながら、第７期のやり方を少しブラッシュアップするかたちを並行してやるというかたちが現実的かなと思う。第７期もも少し指標は絞り込んでもいいくらいだと思う。

（会長）

そうすると、第７期計画の取組に関する資料３に関しては、ポイントだというところが網掛けになっていると思うので、その部分を中心に見ていって、第７期がうまく進んでいるか、数字だけで判断できないところは何か一歩踏み込んだ方が良いという意見もあるので、その辺は少し考えていくにしても、語句や内容は修正箇所があるかもしれないが、それはそれで第７期を見て行こうと。数字で見るだけではないという部分については、それはもう反省点になっているので、その反省に基づいて第８期を策定していく。第７期と第８期は決して無関係ではないと思うので、その反省に立った上で第８期を考えていくということでよろしいだろうか。

（全委員）

はい。

（会長）

他に意見はあるか。

（委員）

資料 4-1 に書かれている第７期の反省点で現状分析が不十分であったとあるが、これが真実であれば、ギャップがわからない中で動き出したということになるので、ＰＤＣＡを回しても結果がでないことになる。この反省点についての記載内容は少し検討した方が良いと思う。先ほどの委員からあった第７期と第８期の意味合いの話しからすると、ギャップ差の捉え方が変わってきていると思うので、書き方を工夫した方がよい。

（会長）

資料 4-1 の反省点の文書の言葉のことだろうか。

（委員）

そうである。現状分析が不十分なところで計画を立てるということは、あり得ないと思う。

（会長）

現状分析が不十分だったという文章について、違う言い方があるのではないかということか。

（委員）

そうである。第７期の計画については良くまとまっているので、この文章はどうかと思うので検討してもらえればと思う。

（会長）

次期計画に向けて現状分析の工夫が必要だというような記載にした方がよいだろう。次回の審議会はいつ頃になるのだろうか。

（事務局）

年度が明けてからの開催を考えている。

（会長）

少し時間があるので、今続けているグループワークで先ほど出てきた課題、指標をつくることについては検討ができるのではないか。第８期に向けての検討と合わせて第７期のことについても検討してもらっても良いかもしれない。そのようなかたちで進めていくのでよろしいか。第８期に向けて、今は一歩一歩進めていく段階なので焦る必要はないと思う。委員からの意見もあったが、何か一つ例にあげて、こんなかたちで進めていこうというものが出来て、それを他のものに当てはめていくという方法もあると思う。一遍に全てできるというのは無理だと思うので、一歩一歩進めていければと思う。

（委員）

資料 4-1 の第７期計画の反省点について、細かいかもしれないが、例えば１番のところは施策・事業を行なうことが目的化してしまったというよりも、それが中心課題であったという書き方にして、2 番のところは、施策・事業を行なった成果というよりは、施策・事業をどれだけ展開できたかどうか数値で把握したと書いてもらって、今後については、それが目標に近づいているかどうかを図るようにしていきたいと書いて、3 番目のところに、現状分析に工夫をしていくことによって第８期のよりよい計画をつくっていくというようにしてはどうだろうか。

（会長）

その辺は言葉の問題だと思うので、出てきた意見を踏まえて検討していただくということでよろしいか。議事事項１と 2 については、そういったかたちで進めていくということでよろしいか。

（全委員）

はい。

５　その他

６　閉会